多田容子がゆく
～異分野への挑戦

# 008

# 伊藤 ゆり

ジェッツ・アカデミー代表

## 日本人として、話したくなる英語学校

伊藤ゆり（いとう・ゆり）
神戸女学院大学文学部英文学科卒。カリフォルニア大学サンタクルーズ校（UCSC）政治学部卒（with College Honors & Honors in the Major）、コロンビア大学 TESOL 英語教授法課程修了。
英検一級（優良賞）、通訳案内業免許取得
神奈川県渉外部通訳職、会議通訳、英検面接委員
米国メリーランド州政府駐日代表を経て 通訳・翻訳会社（有）ジェッツ・インコーポレイテッド代表取締役（本社所在地：横浜市）
英語学校ジェッツ・アカデミー HP http://www.jetsacademy.org/

**私たちは、なぜ英語を学ぶのか。学んでも、話さないのはどうしてか。そこには知識や技術にも勝る壁を感じる。会話の本質を考え、コミュニケーションはどのような時に生まれるのかに着目した英語教室「ジェッツ・アカデミー」を訪ねた。**

伊藤ゆり先生、英語教室、ジェッツ・アカデミーの一室にて。

### 英語より、まず話す力

日本人は、いつまで経っても英語が苦手というイメージがある。海外に行き、言いたいことが何もいえずに愕然とした、というトラウマをもつのは、筆者だけだろうか。

そんな日本人の心を変えてくれる場がある。阪急西宮北口駅前の英語教室「ジェッツ・アカデミー」だ。代表の伊藤ゆり先生は、アメリカで英語を学び、英検一級（優秀賞）、会議通訳、通訳ガイド、翻訳（公文書を含む）等、数多くのスキルとキャリアをもつ語学の玄人。こう書けば、とてもお硬い専門家と思えるが、そんな先生が、今の英語教育の問題点を知り尽くした上で、五年前にソフトでユニークな教室を開講した。まず、英会話サロンの生徒さん方にお話をうかがってみた。

**――サロンに来られたきっかけは？**

「海外旅行で英語が話したくて」「頭の体操、ボケ防止をかねて。ここへ来ると、皆さん話題が豊富で、すごく頭を使うんです。英語はスポーツと同じですね」



**――ここの特徴はどんなところですか？**

「いろんな方と交流できること」「このサロンに来て気づいたのは、『話す内容を持つ』ことの大切さ。自分って何だ、と突きつけられた感じがします」

少し厳しい話も聞こえてきた。が、伊藤先生が重視しているのはまさに、話す内容とコミュニケーション力である。そのために、本人をリラックスさせ、潜在能力を引き出す工夫もしている。

「先生は、人に恥をかかせません。失敗しても安心。完璧に話せなくても、ちょっとでも言ってみれば、ちゃんと理解して、くみ取ってくれる」「上から目線じゃないのがいい」「決まったテキストに沿ってやるわけじゃないので、予習しなくても来られるのが嬉しい」

さすがサロンで会話術を磨いておられる生徒さんだけあって、話し方がスムーズだ。「先生方は、話をうまくふってくださる。きき方が上手ですね」という感想も多かった。

英会話サロンでは、例えばネイティブの講師がまず生徒に話題をふり、ネタがなくなれば、その日のトピックを出すという形で進めるという。ひとつの歌を聴きながら皆で話すとか、今回はこの小説について、など。

「伊藤先生は話題が多様で、政治なんかの話もよくされます。ニュースの内容について、みんなで怒ったり（笑）。ここへ来て、新聞をよく読むようになりましたね」

講師自身が、通訳や外交関係、英語指導など、様々な現場でコミュニケーション力を高めてきた人達だから、できる技なのだろう。

「私のほうが、いつもサロンで学んでいます」と、伊藤先生。先生といえども、日々の積み重ねにより、話す力は無限に伸ばせるのだ。話す力と一体化して培われる語学力は強い。

### イングリッシュ・カフェに乱入

実際、英会話サロン（中級）にお邪魔した。伊藤先生から、筆者について過分なご紹介がなされると、生徒さんから質問が飛び出す。

「最近、歴女というのが流行っていますが、なぜだと思いますか」。これは日本語だったので、私も答えられた。一通り話が終わると、ネイティブのジェイソン先生が、「さっき、あなたは何を話しましたか？」と、初めに質問した生徒さんに英語できいた。そこから、自然な流れで英会話が始まる。別の方が「最近は、日本の男性が弱くなったので、強い武将に憧れるんじゃないですか」などと、述べる。興味深い意見が次々に飛び交った。こんなに和風な内容を、自由に話し合う様子に驚く。

英語の会話をきいていると、たいていい気おくれする筆者だが、不思議とここでは、余計な緊張感や圧力を感じない。途中でまた日本語の会話になり、武士道や忍者についての質問も出た。私はほぼ日本語で、「忍者の走り方」等の動作もまじえつつサロンを荒らし回った（？）結果になったが、ひとつふたつは、英単語がふっと口から出たりもした。言いたいことがあって、楽しい場というのは、言葉を引き出す力をもつのだと実感した。中には、「初めはイエス、ノーしか言えなかったんです」という方も。五年ほど経った今では、すっかりフリートークに溶け込んでいる。

英会話は、日本語より不自由だと思い込んでいた筆者にとって、意外なご意見もあった。

「職業柄、人に気を使って話をすることが多いので、このサロンではストレートにものが言え、ストレス発散になっています」「英語だと、日頃の自分とは別の人格で、立場なんかも関係なく話せるのが楽しい」「日本語では、語尾を曖昧にしたり、ごまかしていた部分も、はっきり話す習慣がついた」など。英語は、主語と動詞が先行し、「～は○○だ」と言い切るのが基本形態。そういうシンプルな言語が、明快な自己表現力を開花させることもあるのだ。

「この教室のシステムは、何回でも来られるのがいい」という生徒さんもいた。月会費を払えば、イングリッシュ・カフェ、会話のための楽しい英文法、英会話、英語検定、ビジネス英会話、ニュースの英語の全枠に参加し放題なのだ。日曜日には、オープンハウスとしてサロンを低料金で開放。教材、英文雑誌、DVD、アメリカのニュース番組CNNなどが自由に閲覧可能だ。「英語何でも相談コーナー」もある。ビジネスレターの英文校正、資格、留学関係などいろいろな相談ができる。ネイティブとの会話も楽しめ、午後には映画上映も行なう。

伊藤先生いわく「とにかく、たくさん話して欲しいんです。そして、できるだけ安く学べるように」。生徒さんの中には、他の英会話スクールに通った経験をもつ方もいた。「この教室は、使わないようなテキストを、やたら買わされないのもいい」。意欲があれば、場所も教材も、授業の枠も、出会った人材も、フル活用して学べるのだ。

## オープンで温かい場

伊藤先生の語学力、英語感、そしてキャラクターは、どのように生まれたのだろうか。

「父の仕事が貿易関係で、小さい頃からドイツ人の子なんかが家によく来て、いっしょに遊んでいましたね。でも、英語の勉強を始めたのは中学からでした。私はそれで十分だと思っています。だから、この教室も中学生以上が対象。まず、日本語でちゃんとものが理解でき、言えるようになることが大事。そこがしっかりしている人は、後から英語を始めてもすごく伸びます。日本語で話がおもしろい人は、英語でもおもしろいですし」

なるほど。しかし、外国人のように極自然に、ペラペラ話すことへの憧れも、捨てがたい。

「発音など、細かい問題もありますが、私は、日本人は日本人の英語を話せばいいと思います」

目から鱗だ。筆者などは、日本人の英語になることを恥と思ってきた。が、たとえLとRの発音の区別を必死に練習しても、会話自体は特に上達しない。優先順位を間違っていたのかもしれない。考えてみれば、世界中で英語を話す人々の大半は、何らかのなまりや発音の癖をもつ。それが当然だ。大きく分けても、プリティッシュやアメリカンなどがあり、絶対的に正しい発音というのは、ないようなものだ。とにかく会話できるようになるのが第一で、発音は、よければそれにこしたことはないという程度に考えるのが早道なのだろう。

「話す内容にしても、アメリカ人の作ったテキストをぽんと持ってきても、何か違うし、場面が合わないと思うんです。それより、最近のニュースを取り上げて、『どう思う?』と、きいてみた方が、皆さん、話したくなりますよね。それで、ちょっとボキャブラリーを出して、話し合う。実際に外国人と話すときにも、そういう意見が言えたほうがいいですし」

英会話サロンの様子。伊藤先生とネイティブのジェイソン先生を囲んで、ナチュラルなトークが繰り広げられる。

まったくその通りだ。実践的な英語というと、アメリカ的とかヨーロッパ的なものだと思いがちだが、本当は逆だった。自分自身の発言が必須なのである。

「英語でクッキングという時間に、お料理をしながら、『どうやって作るの?』ときいて、話したり。それが段々、数えられる名詞、数えられない名詞という話になって、最後に、じゃあちょっと教科書で確認してみましょうか、と。とにかく、今ある話題をうまく話せるように、ということを考えています」

日常の柔らかいところから入って、最終的には正しい英語が理解できる。これが伊藤流のようだ。何と先生が英語の勉強に真剣に打ち込んだのは、アメリカに渡って以降だという。もちろん、多大な努力をされたはずだが、大人になってからでも、ここまでできるのだ。逆に、子ども時代や十代に、英語だけに没頭せず、幅広いことを学び、人に接する能力を身につけていた方が、後々、活きるのかもしれない。

先生の場合、結婚、子育てなどのご経験も、この気さくで温かいキャラクターの形成に関わっていそうだ。子育て中は働くのが大変な時期もあったという。生徒さんが「伊藤先生は、時間の使い方が密で、頭の回転がすごく早い」と話されていた。現在も、教室経営のほか、もともと代表取締役を務めるジェッツ・インコーポレイテッドでの翻訳の仕事も続け、趣味も多いという濃い日々。そのエネルギーやサービス精神の源について尋ねた。

「祖母や母の影響はあるかもしれません。祖母は子だくさんで、十人くらいの家族の面倒を見ていました。クリスチャンで、神父様なんかも家にしょっちゅう出入りするというような毎日でした」

多くの人を受け入れ、育む家庭。オープンハウスという発想のルーツが垣間見える。

外国語とは、ややこしい暗記モノでもなければ、狭い専門分野でもない。人と人をつなぐ言語なのだ。言葉を覚え始めた子どもは、周りに優しく励まされ、間違っても繰り返しチャレンジできる。そういう環境の中で、何とか自分の意思を伝えたいと願うようになり、嬉々として学習する。これに似た温かい形で導かれれば、日本人も抵抗なく、いつか日本人ならではの英語が話せるはずだ。

**多田容子**（ただ・ようこ）
作家。一九九九年柳生十兵衛を描いた時代小説『双眼』（講談社）でデビュー。二〇〇四年兵庫県芸術奨励賞受賞。執筆のかたわら、自ら柳生新陰流の兵法や手裏剣術など武術を学ぶ。また、エニアグラム（心理学）も十年以上にわたり独学で研究中。
主な著書／小説『柳影』（やみとり屋）『女剣士・一子相伝の影』（月下妙剣）『柳生双剣士』（以上、講談社）、『甘水岩　修羅の忍び』（伊賀）（PHP研究所）、『柳生王定記』（集英社）。その他、『自分を生かす古武術の心得』（集英社新書）、『マガジンハウス』（新陰流　サムライ仕事術）。共著『武術の創造力』（甲野善紀氏との対談）、『不滅の侍伝説』（子連れ狼）（小池一夫氏との対談）。最新刊は『おばちゃんくノ一　小笑組』（PHP文芸文庫）。